

# 夢のお七

岡本綺堂

青空文庫



大田蜀山人の「一話一言」を読んだ人は、そのうちにこういう話のあることを記憶しているであろう。

八百屋お七の墓は小石川の円乗寺にある。妙栄禅定尼と彫られた石碑は古いものであるが、火災のときに中程から折られたので、そのままに乘せてある。然るに近頃それと同様の銘を切つて、立像の阿弥陀を彫刻した新しい石碑が、その傍かたわらに建てられた。ある人がその子細をたずねると、円乗寺の住職はこう語つた。

駒込の天沢山龍光寺は京極佐渡守高矩の菩提寺で、屋敷の足軽がたびたび墓掃除にかよつていた。その足軽がある夜の夢に、いつもの如く墓掃除にかようところで小石川の馬場のあたりを夜ふけに通るかかると、暗い中から鶏が一羽出て来た。見ると、その首は少女で、形は鶏であつた。鶏は足軽の裾をくわえて引くので、なんの用かと尋ねると、少女は答えて、恥かしながら自分は先年火あぶりのお仕置をうけた八百屋の娘お七である。今もなおこのありさまで浮ぶことが出来ないから、どうぞ亡きあとを弔つてくれと言つた。頼

まれて、足軽も承知したかと思うと、夢はさめた。

不思議な夢を見たものだと思っていると、その夢が三晩もつづいたので、足軽も捨ては置かれなような心持になって、駒込の吉祥寺へたずねて行くと、それは伝説のあやまりで、お七の墓は小石川の円乗寺にあると教えられて、更に円乗寺をたずねると、果してそこにお七の墓を見いだした。その石碑は折れたままになっているが、無縁の墓であるから修繕する者もないという。そこで、足軽は新しい碑をこんりゅう建立し、なにがしの法事料を寺に納めて無縁のお七の菩提を弔うことにしたのである。いかなる因縁で、お七がかの足軽に法事を頼んだのか、それは判らない。足軽もその後再びたずねて来ない。

以上が蜀山人手記の概要である。案ずるに、この記事を載せた「一話一言」の第三巻は天明五年ごろの集録であるから、その当時のお七の墓はよほど荒廃していたらしい。お七の墓が繁昌するようになったのは、寛政年中に岩井半四郎がお七の役で好評を博した為に、円乗寺内に石塔を建立したのに始まる。要するに、半四郎の人気を煽ったのである。お七のために幸いでないとは言えない。

お七の墓のほりにある阿弥陀像の碑について、円乗寺の寺記には、  
「又かたはらに弥陀尊像の塔あり。これまたお七の菩提のために後人の建立しつる由なれ

ど、施主はいつの頃いかなる人とも今明白に考へ難し。或はいふ、北国筋の武家何某、なにがし夢中にお七の亡霊告げて云ふ、わが墳墓は江戸小石川なる円乗寺といふ寺にあれども、後世を弔ふもの絶えて、安養世界に常住し難し、されば彼の地に尊形の石塔を建て給はゞ、必ず得脱成仏すべしと。これによつて遙に來りて、形の如く営みけるといへり。云々。うんぬん」

この寺記は同寺第二十世の住職が弘化二年三月に書き残したもので、蜀山人の「一話一言」よりも六十年余の後である。同じ住職の説くところでも、天明時代の住職と弘化時代の住職との話のあいだには、かなりの相違がある。しかもお七の亡霊が武家に仕える者の夢に入つて、石碑建立の仏事を頼んだということは一致しているのである。いずれにしても武家に縁のある人が何かの事情でお七の碑を建立するについて、あからさまにその事情を明かし難く、夢に托して然るべく取計らつたものであらうと察せられる。

私がこんなことを長々と書いたのは、お七の石碑の考証をするためではない。そういう考証や研究は他に相当の専門家がある。私が今これだけのことを書いたのは、ある老人からそれに因ちなんだ昔話を聞かされたからである。その話の受売りをする前提として、昔もこういう事があつたと説明を加えて置いたに過ぎない。

そこで、その話は「一話一言」よりも八十余年の後、さらに円乗寺の寺記よりも二十三

年の後、すなわち慶応四年五月の出来事で、私にそれを話した老人は石原治三郎（仮名）という三百五十石の旗本である。治三郎はその当時廿八歳で、妻のお貞は廿三歳、夫婦のあいだにお秋という今年四歳になる娘があった。慶応四年——それがいかなる年であるかは今更説明するまでもあるまい。石原治三郎が四谷の屋敷を出て、上野の彰義隊に加わったのは、その年の四月中旬であった。

彰義隊らとは成るべく衝突を避けて、無事に鎮撫解散させるのが薩長側の方針であったから、直ぐには攻めかかって来ない。彰義隊士も一方には防禦の準備をしながら、そのあいだには徒然つれづれに苦しんで市中を徘徊するのもある。芝居や寄席などに行くのもある。吉原などに入り込むものもある。しかも自分の屋敷へ立寄るものは殆どなかった。殊に石原の家では、主人が家を出ると共に、妻子は女中を連れて上総かずさの知行所へ引つ込んでしまつて、その跡はあき屋敷になつていたので、もう帰るべき家もなかった。

五月二日は治三郎の父の祥月命日である。この時節、もちろん仏事などを営んでいるべきではないが、せめてはこうして生きている以上、墓参だけでもして置こうと思ひ立て、治三郎はその日の朝から上野の山を出た。菩提寺は小石川の指ヶ谷町にあるので、型のごとくに参詣を済ませ、寺にも幾らかの供養料を納め、あわせて自分が亡きあとの回向えんぎょうをも

頼んで帰った。その帰り道に、かの円乗寺の前を通りかかった。

「あの時はどういう料簡だったのか今では判りません。」と、治三郎老人は我ながら不思議そうに語るのであった。

まったく不思議と思われるくらいで、治三郎はその時ふいとお七の墓が見たくなったのである。彰義隊と八百屋お七と、もとより関係のあるべき筈はないが、彰義隊の一人石原治三郎は唯なんとなくお七の墓に心を惹かれたのである。彼は円乗寺の門内にはいつて、お七の墓をたずねて行つた。墓のほとりの八重桜はもう青葉になつていた。痩せても枯れても三百五十石の旗本の殿様が、縁のない八百屋のむすめなどに頭を下げる理屈もないが、相手が墓のなかの人であると思つと、治三郎の頭はおのずと下がつた。

寺を出て、下谷の方角へ戻つて来ると、池の端いけはたで三人の隊士に出逢つた。

「ひるめし  
「午飯を食いに行こう。」

「がんなべ  
「雁鍋へ行こう。」

四人が連れ立つて、上野広小路の雁鍋へあがつた。この頃は世の中がおだやかでない。殊に彰義隊の屯所の上野界限は、昼でも悠々と飯を食っている客は少かつた。四人は広い二階を我物顔に占領して飲みはじめた。あしたにも寄手よせてが攻めて来れば討死と覚悟してい

るのであるから、いずれも腹いっぱい飲んで食って、酔って歌った。相当に飲む治三郎もしまいには酔い倒れてしまった。

大仏の八つ（午後二時）の鐘が山の葉桜のあいだから近くひびいた。

「もう帰ろう。」と、一同は立上がった。

治三郎は正体もなく眠っているの、無理に起すのも面倒である。山は眼の前であるから、酔いがさめれば勝手に帰るであろう、と他の三人はそのままにして帰った。置去りにされたのも知らずに、治三郎はなおはんとぎ半時ばかり眠りつづけていると、彼は夢を見た。

その夢は「一話一言」と同じように、八百屋お七が鶏になったのである。首だけは可憐の少女で、形は鶏であった。

「お断り申して置きますが、わたしが蜀山人の〈一話一言〉を読んだのは明治以後のこと、その当時はお七の鶏のことなどは何にも知らなかったのです。」と、治三郎老人はここで注を入れた。

治三郎は勿論お七の顔など知っている筈はなかったが、その少女がお七であることを夢のうちに直感した。さつき参詣してやったので、その礼に来たのであろうと思った。場所はどこかの農家の空地とでもいいそうな所で、お七の鶏は落穂でもひろうように徘徊して



いた。かれは別に治三郎の方を見向きもしないので、彼はすこしく的あてがはずれた。なんだか忌々いまいましいような気になったので、彼はそこらの小石をひろって投げつけると、鶏は羽は搏ばたきをして姿を消した。

夢は唯それだけである。眼がさめると、連れの三人はもう帰ったというので、治三郎も早々に帰った。山へ帰れば一種の籠城である。八百屋お七の夢などを思い出している暇はなかつた。

十五日はいよいよ寄手を引寄せて戦うことになった。彰義隊の敗れたその日の夕七つ頃（午後四時）に、治三郎は根津から三河島の方角へ落ちて行つた。三、四人の味方には途中でぐれてしまつて、彼ひとり雨が雨のなかを湿ぬれて走つた。しかも方角をどう取違えたか、彼は千住に出た。千住の大橋は官軍が固めている。よんどころなく引つ返して箕輪みのわた田圃んぼの方へ迷つて行つた。

## 二

蓮田を前にして、一軒の藁葺屋根が見えたので、治三郎はともかくもそこへ駈け込んだ。

彼は飢えて疲れて、もう歩かれなかつたのである。ここは相当の農家であるらしかったが、きよようの戦いにおどろかされて雨戸を嚴重に閉め切っていた。

治三郎は雨戸を叩いたが、容易に明けなかつた。続いて叩いているうちに、四十前後の男が横手の竹窓を細目にあけた。

「おれは上野から来たのだ。ひと晩泊めてくれ。」と、治三郎は言った。

「上野から……。」と、男は不安そうに相手の姿をながめた。「お気の毒ですが、どうぞほかへお出でを願います。」

言葉は丁寧であるが、すこぶる冷淡な態度をみせられて、治三郎はやや意外に感じた。ここらに住むものは彰義隊の同情者で、上野から落ちて来たといえ、相当の世話をしてくれると思っていたのに、彼は情なく断るのである。

「泊めることが出来なければ、少し休息させてくれ。」

「折角ですが、それも……。」と、彼はまた断った。

たとい一泊を許されないにしても、暫時ここに休息して、一いっほん飯の振舞にあずかつて、それから踏み出そうと思っていたのであるが、それも断られて治三郎は腹立たしくなった。「それもならないと言うのか。それなら雨戸を蹴破つて斬り込むから、そう思え。」

戦いに負けても、疲れていても、こちらは武装の武士である。それが眼を瞋いからせて立ち  
はだかつているので、男も気怏きおくれがしたらしい。一旦引つ込んで何か相談している様子で  
あつたが、やがて渋々に雨戸をあけると、そこは広い土間になっていた。治三郎を内へ引  
入れると、彼はすぐに雨戸をしめた。家内の者はみな隠れてしまつて、その男ひとりがそ  
こに立つていた。

治三郎は水を貰つて飲んだ。それから飯を食わせてくれと頼むと、男は飯に梅干を添え  
て持ち出した。彼は恐れるように始終無言であつた。

「泊めてはくれないか。」

「お願いでございますから、どうぞお立退きを……。」と、彼は嘆願するように言つた。

「詮議がきびしいか。」

「さきほども五、六人、お見廻りにお出でになりました。」

「そうか。」

上野から来たか、千住から来たか、落武者搜索の手が案外に早く廻っているのに、治三  
郎はおどろかされた。こここの家で自分を追つ払おうというのも、それがためであると覺つ  
た。

「では、ほかへ行ってみよう。」

「どうぞお願い申します。」

追い出すように送られて、治三郎は表へ出ると、雨はまだ降りつづいていいる。飯を食つて休息して飢えと疲れはいささか救われたが、さて、これから何処へゆくか、彼は雨のなかに突つ立つて思案した。

搜索の手がもう廻つていいるようでは、ここらにうかうかしてはいられない。どこの家でも素直に隠まってくれそうもない。どうしたものかと考えながら、田圃路をたどつて行くうちに、彼はふと思いついた。かの農家の横手には可なり広いあき地があつて、そこに大きい物置小屋がある。あの小屋に忍んで一夜を明かそう。あしたになれば雨も止むであろう。搜索の手もゆるむであろう。自分の疲労も完全に回復するであろう。その上で奥州方面にむかつて落ちてゆく。差しあたりそれが最も安全の道であろうと思つた。

治三郎は又引つ返した。雨にまぎれて足音をぬすんで、かの農家の横手にまわつて、型ばかりの低い粗い垣根を乗り越えて、物置小屋へ忍び込んだ。雨の日はもう暮れかかつていいるのと、母屋おせやは嚴重に戸を閉め切つていいるのとで、誰も氣のつく者はないらしかつた。

薄暗いのでよく判らないが、小屋のうちには農具や、がらくた道具や、何かの俵のよう

な物が積み込んであった。それでも身を容れる余地は十分にあるので、治三郎は荒むしろ二、三枚をひき出して土間に敷いて、疲れたからだを横たえた。さつきまでは折おりにきこえた鉄砲の音ももう止んだ。そこらの田では蛙がそうぞうしく啼いていた。

雨の音、蛙の音、それを聴きながら寝ころんでいるうちに、治三郎はいつしかうとうとと眠ってしまった。その間に幾たびもお七の鶏の夢をみた。ときどき醒めては眠り、いよいよ本当に眼をあいた時は、もう夜が明けていた。夜が明けるところか、雨はいつの間にか止んで、夏の日が高く昇っているらしかった。

「寝過したか。」と、治三郎は舌打ちした。

夜が明けたら早々にぬけ出す筈であったのに、もう午ひるになってしまった。搜索の手がゆるんだといつても、落武者の身で青天白日のもとを往来するわけにはゆかない。なんとか姿を変える必要がある。もう一度この家の者に頼んで、百姓の古着でも売って貰わなければなるまい。そう思つて起きなおる途端に、小屋の外で鶏の啼き声が高くきこえた。治三郎はふとお七の夢を思い出した。

又その途端に、物置の戸ががらりとあいて、若い女の顔がみえた。はつと思つてよく視ると、それは夢に見たお七の顔ではなかった。しかもそれと同じ年頃の若い女で、おそら

くここの家の娘であろう。内を覗いて、かれもはつとしたらしかった。

「早く隠れてください。」と、娘は声を忍ばせて早口に言った。

隠れる場所もないのである。搜索隊に見付かったら百年目と、かねて度胸を据えていたのであるが、さてこの場合に臨むと、治三郎はやはり隠れたいような気になって、隅の方に積んである何かの俵のかけに這い込んだ。しかも、これで隠れおおせるかどうかは頗る疑問であるので、素破すわといわば飛び出して手あたり次第に斬り散らして逃げる覚悟で、彼はしっかりと大小を握りしめていた。娘はあわてて戸をしめて去った。

鶏の声が又きこえた。表に人の声もきこえた。

「物置はここだな。」

搜索隊が近づいたらしく、四、五人の足音がひびいた。家内を詮議して、更にこの物置小屋をあらために来たのであろう。治三郎は片唾かたずをのんで、窺っていた。

「さあ、戸をあける。」という声が又きこえた。

家内の娘が戸をあけると、二、三人が内をのぞいた。俵のかけから一羽の雌めんどり鶏がひらりと飛び出した。

「むむ、鶏か。」と、かれらは笑った。そうしてそのまま立去ってしまった。

治三郎はほつとした。頼朝の伏木隠れというのも恐らくこうであつたらう。彼等は鶏の飛び出したのに油断して、碌々に小屋の奥を詮議せず立去つたらしい。鶏はどうしてここにいたか。娘が最初に戸をあけた時に、その袂の下をくぐつて飛び込んだのかも知れない。

娘が治三郎にむかつて早く隠れろと教えたのは、彼に厚意を持ったというよりも、ここで彼を召捕らせては自分たちが巻き添いの禍を蒙るのを恐れた為であろう。鶏が飛び込んだのは偶然であろうが、今の治三郎には何かの因縁があるように考えられた。彼は又もやお七の夢を思い出した。

「お話はこれぎりです。」と、治三郎老人は言った。「その場を運よく逃れたので、こんに今日までこうして無事に生きているわけです。雁鍋でお七の夢をみたのは、その日の午前ひるまえに円乗寺へ墓まいりに行ったせいでしょう。前にもいう通り、なぜ其の時にお七の墓を見る気になつたのか、それは自分にも判りません。又その夢がへ一話一言の通りであつたのも、不思議といえば不思議です。私はそれまで確かにへ一話一言などを讀んだことはなかつたのです。箕輪の百姓家に隠れている時に、どうして二度目の夢をみたのか、そ

れも判りません。まさかにお七の魂が鶏に宿って、わたしを救ってくれたわけでもありません。すまいが、なんだか因縁があるように思われなくても無いので、その後も時々にお七の墓まいりに行きます。夢は二度ぎりで、その後にも一度も見ただことはありません。」

昭和九年十月作「サンデー毎日」



# 青空文庫情報

底本：「鎧櫃の血」光文社文庫、光文社

1988（昭和63）年5月20日初版1刷発行

1988（昭和63）年5月30日2刷

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：松永正敏

2006年6月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

# 夢のお七

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>